

# 分科会「入門講座」報告

## －聾歴史研究と調査について－

講師：那須 英彰／司会：芳本 光司

- ①「藤本敏文」の研究調査
  - ②「高聾山」について
  - ③「江戸時代の文献」の調査方法
  - ④「建皇子」生存時の背景
- 

### ①「藤本敏文」の研究調査

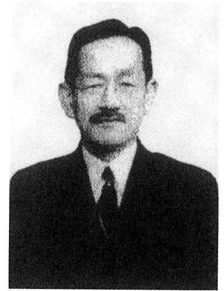
#### ●ろうあ福祉の向上に献身した藤本敏文

昔のろうあ者は、身体障害者手帳4級と軽い等級にあり、国のために尽くした戦傷身障者が一番重く1級だった。

当時の全日本ろうあ連盟長だった藤本は、「ろうあ」は耳が聞こえないために情報から疎外され、電話もできず、免許の取得権が認められないために車の運転もできず、まともな仕事を与えられないという深刻な問題に直面しており、社会的に大変弱い立場にあると反論し、粘り強く等級の格上げを要求した。

幾度の交渉の甲斐が実って、改善された。

また、障害福祉年金の受給も認められ、国鉄（現・JR）運賃割引も半額の対象になった。もちろん周囲の協力もあったが、藤本の力添えなしでは、成し遂げられなかった成果である。



#### ●「藤本敏文」研究の発端

上の要望が叶えられ、ろうあ者の生活に支障をきたすことがなくなった。そういうようにろうあ福祉の基礎を築き上げた「藤本の実行力・手腕・力量」には目を見張るものがある。ろうあ界のリーダーなる、その偉大な藤本の家庭はどうなっていたかを知りたくなった。これまでは、ろうあ福祉の向上に全身渾身で力を振り絞った連盟長というイメージが強かったため、家庭については皆無だった。はて探してみると、非常に複雑な環境にあり、人生も波乱万丈だった結果は予想以上のものであり、これほど研究のやりがいを感じるものはなかった。

藤本は、所得をほとんどろうあ運動のために使い切って東奔西走するあまり、子供のいる家庭に見向きすることはほとんどなかった。

#### ●調査方法

##### ◆対面拒否、手紙で聞き取り

藤本はすでに故人となっている。昭和51年3月31日死去している。

まず子供や子孫がないかを確認することからスタートした。

結果、藤本には子供3人いたことが判明。長女「安」を始め、2人の弟がいた。しかし、2人の男の子「明」「敬」は成年になる前に病死してしまっている。幸い、実娘だけ生きていたので「よかった」と喜んだかと思ったら、その肝心な実娘が私と接触を極力避けていた。家庭を顧みない父親の藤本敏文を見てきたから、ろうあ者に対して不信を抱いていたからではないかと思う。いきなり暗雲がたちこめ、調査活動が足踏み状態に陥った。

これ以上、相手の心理（精神）に害を与えてはならないと思い、直接に会うことはかなり難しいと判断した。別の方法を練ったとき、「書簡」を思いついた。まず、電話で「手紙で質疑応答させてよいか」と確認したら、相手は「それなら」と承諾してくれた。

相手の機嫌を損なわないように、質問内容、文章全体に細心の注意を払った。

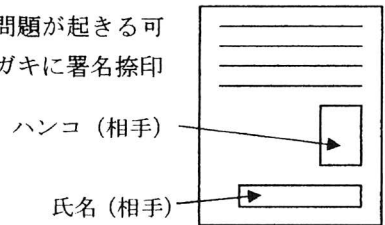
相手がこちらの質問に全面的に協力してもらえぬ雰囲気も考えなければならなかった。

よく吟味した上で、恐る恐る書簡を送った。

それがなんと色々なことを書いて下さり、手紙やり取りもうまくいった。

本当に協力的だった。おかげで、更に調査が進んだ。

最終目的は、一般公開の出版なので、プライバシーや著作権などの問題が起きる可能性も視野に入れなければならない。約束交わりの証しとして、ハガキに署名捺印してもらった。



(質問) 1. 実娘と手紙やり取りする中で、実娘さんの考えが変わったことがありますか？

2. 藤本は、父親として家族を思いやらなかったことについて反省したでしょうか？

(那須) 1. 家庭のことを考えずろうあ運動に明け暮れた自分の父を尊敬しないが、手話通訳者の活躍が目覚ましい現在があるのは、自分の父親のお陰だとつくづく意識している部分が伺える箇所が見られる。

2. 2人の息子が死んだのをひどく悲しんだと回想を書き残している。ろうあ福祉の向上のためにやむをえない時期でさぞ心苦しかったと思う。

藤本の持論は「子供は3人」とこだわっていた。

◆藤本を批判する古老多し、それでも粘って・・・

藤本を知る古老たちにも積極的に聞き込みを行なった。

ビデオ収録もし、多くの証言を集めた。

資料も写真もあればコピーもした。

しかし、古老の中には、「藤本は家庭をほったらかして私利私欲に走った無責任」と藤本を不評にみる人が何人かいた。

少しでも情報を収集しなければならない。

あきらめず、なんとか引き寄せる雰囲気をうまく作り上げ、やっとな腹を割って藤本エピソードを話してくれるようになった。

そういう手段で藤本に関わった人に接することによって、次々に新しい人物に出会い、だんだん聴取範囲が広がっていった。よって次々と新発見を見出すことができた。

粘って聞き込む根性はとても重要である。

もちろん、藤本を尊敬する人も何人かいていろいろ聞かせていただいた。

◆「足」でイメージつかむ

今度は両親そして生い立ちについて調べた。

当時は今の東大阪市水走に過していた。当時の水走は田んぼが広々と広がっていたが、今は高速道路、

高い建物がそびえていて、すっかり昔の面影はなくなっている。父は庄屋を営んだが、早いうちに逝去し、家計は苦しくなった。その為に京都市立盲啞院を1年半くらいで退学し、母の生まれ里・兵庫県の丹波に住まいを移した。丹波といえば「まつたけ」の名産地である。

その丹波に足を運び、藤本の暮らしぶりのイメージ作りに努めた。

藤本は大阪に住み着くまで、教鞭をとる聾学校を転々とかえたので、それらの地も訪ねた。

#### ◆おしゃれな藤本

集めた写真のどれを見ても、おしゃれが目につく。

古老の証言もやはり「藤本はおしゃれ好き」と一致している。

(質問) こんな立派な服装をしているのはお金持ちでしょうか？

昔といえば、いい服を着るのは、身分高い人やお金持ちに限られていたようですが…。

(那須) あくまでお金持ちのように振る舞っていたのではないかと思う。

実際はお金がなく、おしゃれ好きだから、そのような服装を着ていたと思う。

連盟長という貫禄を見せるには外見を立派に見せるのが、昔としては常識というか当たり前の時代であったと思う。

#### ◆難題だったお墓探し

「お墓？無いよ…」

みんなお墓は存在しないと知っている。知る者はいなかった。

捨てられたお墓の山々に埋もれていると言う者もいた。

あまりにもショッキングだった。

「こんなはずはない」と疑念を抱いた。

日本のろうあ者のために立派に貢献した人のお墓がこんなザマにあるとは信じがたい。

まず、実娘に確認を求めたが、初めて聞く「森川家」さらに「河盛家」に聞けばわかると教えられ、首をひねった。「藤本家」ではなくよその家が管理とは？ますますわからなくなった。

謎だらけで難問を解釈するまで時間を費やした。

藤本は養子として森川家の娘(きぬ)と結婚し、森川家に籍を入れたことを聞いて、詳細に調べ、やっとお墓の居場所をつかめた。(実際は二度目の妻の増田光子さんとは最初の婚姻届をしたのであって、森川きぬさんとは婚姻届をしなかったというのである。戸籍では藤本敏文氏として光子様も藤本の姓名で記録してある。)河盛家は森川家ののれん分けで引継ぎ、墓の管理をしていることがわかった。

墓の所在地は京都の大谷本廟だった。

大谷に出向くと、普通のお寺の何倍以上もお墓が立ち並んでおり、どの墓か見分けができないほどだった。教えてもらったお墓の番号と照合しながら、何時間もかかって探し回っても見つからないのでお手上げ。

住職に案内を求め、墓を見つけることができたが、「藤本」の名前がなかった。泉州堺、森川家と刻まれている。

#### ◆よろけた大崎元副連盟長

お墓の存在を報告するために、大崎の元に訪れた。

(那須)「藤本のお墓が見つかった」

(大崎)「……」

しばし絶句し、急に大崎の顔は顔面蒼白になった。

足がよろけ、しばらくしゃがんだ。

ようやく開き直った大崎は「どこにあるんだ」と尋ねてきた。

(那須)「京都の大谷です」

(大崎)「まさかこんなところにあるとは……」

その後、大谷に案内した。

大崎は高齢のため、足が弱まっており、杖をつきながら長い石段をたどたどしい足取りで登り始めた。

(那須)「おんぶしましょうか」

(大崎)「いや自分で歩く」

大崎は懸命に杖をたよりに登っていくが、なかなか進まない。

(那須)「あと5分ですが……」

(大崎)「あ～5分？う～んこの5分の間に藤本と活躍したことを思い出しながら歩くからええわ。」

もくもく歩き続ける。

(大崎)「まだ？」

(那須)「まだまだですよ」

そこで大崎は立ち止り、後ろを振り向いて、登った長い石段を眺めた。

(大崎)「昔一緒に活躍した道のりと同じなんだ」

なんと重みのある言葉だった。

再び歩き始める。

きつく応えたらしく「まだ？」と訊いてくる。

(那須)「もう少しですよ」

ようやくたどり着いた。

(那須)「これが藤本さんのお墓です」

(大崎)「……………」

『申し訳ない……申し訳ない……このわしを許したまえ』と言わんばかりの顔に変わった。

長い時間に墓を隅々まで見回ったとき、

(大崎)「藤本の名前がないな」

事情を説明すると、大崎は思い出したかのように、

(大崎)「ああ～あの森川家か。」

大崎は、墓に向かって沈黙考し物静かに拝み始めた。

何を思っていたのだろうか。

その雰囲気は重く、身に沁みるものがあった。

墓前参りを終えた後、大崎は感極まった顔になり、まだ昼なのにビールを注文して飲んだ。

見納めることができたことに満足したのか、数ヶ月後大崎はこの世を去った。

これまでの流れはまるでドラマディックでものすごく感動的だった。

藤本が逝去してから21年間もだれも参拝しなかったことを思うと、複雑な気持ちだった。

## ◆本作り

ようやく最終調査のお墓探しを終えたことを機に、最後の仕事「本作り」作業に取り掛かった。山ほど集めた情報を整理した。

たくさん収集したからといって、すべて載せればいいのではない。

載せたい写真などがあっても、欲を捨てて絞らなければならない。

目的に沿ったものを厳選しなければならないし、特にプライバシーに関わるものについては関係者に配慮することも十分考慮しなければならない。関係者と確認を重ねながら進めた。

調査し始めてから本ができるまで2年半くらいを要した。

こうして順次に調査する中で、藤本の性格をつかむことができ、謎のベールに包まれた事実が明るみになることによって作業もはかどれ、目標の出版に達したのである。

(質問) 調査する中で、特に苦労したことはどんなときですか？

(那須) 別に苦労を意識することはなかった。

確かに調査は簡単なものではない。生易しくもない。

だが、苦労を考えると、かえってカベにぶつかり、苦しみ、あきらめてしまうのがオチ。

だから「楽しくやること」をモットーに、情熱を燃やしながらやり通す姿勢を貫いたつもりだ。

多くの謎を解けたときの達成感と喜びは大きく、実に楽しかったものである。

## ●調査するにあたって注意しなければならないこと

### 1. 聞き込み

特に、研究対象者の家族（妻あるいは子孫）に聞き込むときは、あんまり深入りしない程度で聴取を行なうこと。

相手のプライバシー侵害に発展してトラブルが起きる場合がある。

相手に迷惑をかけたなら、今後の聞き込みを拒否されることがある。

### 2. 訪問

訪問するとき、お菓子などの手土産を用意すること。

手ぶらで研究訪問してサッと帰るモラルの低い人がある。

次から訪問拒否されるケースがある。

研究が中断してしまい、せつかくの研究が台無しになる。

### 3. コピー

相手から借りた資料をコピーする場合は、必ず相手の許可を得ること。

そして、必ず返すこと。

### 4. ビデオ

相手はビデオを意識するあまり、緊張して本来の手話語りを発揮できない人が多い。

語り手が意識しないところにビデオを置く方法を工夫すること。

### 5. お墓の写真

お墓を撮ることも、当然許可を得なければならない。

これらのルールをきちんと遵守することを心掛けてほしい。

時間、人との約束などのいろいろな決まり事はきちんと守ることは最低必要不可欠である。

## ②「高聾山」について

「聾」の漢字がついた山名は珍しい。

この場合は「たかつんぼやま」とよんで、鳥取県鳥取市にある小さな山。

所有者に聞いても、正式な山名を知らないという。

これまで「三角山」とよんでいたそうだ。

それで、国土地理院に所在地などを照らし合わせて調べた結果、「高聾山」を正式名称として登録していることが判明した。

所有者に許可を得て、てっぺんに「高聾山 標高288m」の手作り立て札を立てた。

## ③「江戸時代の文献」の調査方法

### ◆日本書紀の「啞」

たとえば、日本書紀に「……其三日建皇子 啞不能語……」があるが、

古典、古語辞書などで単語別に意味を調べてみる

「日」…いわく（申す） 「建皇子」…たてるのみこ（人名）

「啞」…聾 「不能語」…話すことができない

こうして、単語の意味を組み合わせると、

「その3番目の子、建皇子は口がきけない」の意味になっていることが分かる。

「啞」は書き言葉では「おふし」とつづるが、話し言葉では「おうし」と言う。

「あ」ではない。

「啞」が使われたのは、古事記が最初だと思われる。

### ◆奈良時代の「聾」

いつから「聾」が使われたかは定かではないが、奈良時代に「行基」というお坊さんが盲、肢体障害、乞食、ろうあ者などを集めて、施設に収容させたという記録が残っており、奈良時代にも「聾」が使われていたようだ。

「聾」の由来は、中国の「龍（たつ）」からとったもので中国では「ロン」とよぶ。龍は音を耳で聞かないで角で聞き取りながら動き回るから、耳が不自由な人を「聾」という字で示すようになったという説があります。



### ◆江戸時代の聾旅人

「聾の笠印」

十辺舎一丸が編集した「東海道中…」という本に

「おのづから往復同国の人の目を慰め、被り行聾の笠印は…」

があります。



ろうあ者である旅行者が、自分が聾者だということを笠に書いておいたという意味です。つまり、江戸時代にもろうあ者自身が普通の人と同じように旅をしていたこととなりますね。

編者が庶民や身障者の生活ぶりを細々観察して記録したもので、これは江戸時代もろうあ者が生活を営んだことを確認できる貴重な書物といえるでしょう。

#### ④「建皇子」生存時の背景

##### ◆ 8歳で没した建皇子

建皇子は38代天智天皇の第三子で、まったく口がきけず、わずか8歳の幼齡にして亡くなった。

祖母にあたる斉明天皇が建皇子の言葉が不自由であることを不びんに思い、誰よりもこの皇子をかわいがっていた。それゆえ、その死に対する悲しみは激しかったようだ。

建皇子が生きていたのは651～658年。

##### ◆ 「最古の古銭」

これまでの最古の貨幣は「和同開珎」（わどうかいちん・わどうかいほう）だったが、4年前の1999年、奈良県で和同開珎より古い貨幣が出土した。

この貨幣は「富本銭」（ふほんせん）。

- ・和同開珎・・・708年（大和時代）
- ・富本銭・・・680～690年？



富本銭



和同開珎

建皇子の生存は651～658年で、そのあと富本銭が使われたことが事実であれば、建皇子の生存時の背景、環境、経済はどうなっていたかを想像してみることができる。

※そのときの背景や様子などと結び付けて連想することは大切。

■ こうしてそれぞれの内容に合った調査方法で遂行すればよい。

研究方法は自由。

（質問）うちの家族はデフ・ファミリーです。中学3年の息子から「江戸幕末の松田・・・かという武士の弟がろうあ者らしい」と言われましたが、全く分からない私は答える術もありませんでした。教えてください。

（那須）ほおー感心！感心！すごいことです。

「聾歴史」に関心を持つ若い世代の育成は大事です。

本当に頼もしいですね。

松田ではなく正確は「吉田松陰」です。

その吉田松陰の弟はたしかに生まれつきろうあ者です。

名前は「杉敏三郎」。松陰との年齢差は15歳。

苗字が違うのが引っかけますね。

吉田松陰は杉家から養子に行かれたものです。

吉田松陰が処刑されるまで、ものが正常に言えない弟のことが終始念頭から離れることはなかったようです。せめて「聾哑院」を創りたいという夢を抱いたらしい。ろうあ者のための学校を考えたのは、吉田松陰が初めてではないでしょうか。

「吉田松陰の哑弟」の本にも載っています。

終わり

（記録：青山 直幹）

一二七一「注三の「家ノ子」にくらべて結合度が強く、「家ノ子」を複合語とみて、若殿、御曹司と同義に解することもできよう。

二説話の真实性を強調するため、伝承源を虚構したもので、作者またはそれ以前の本話伝承者の作為であらう。

三近い過去と遠い過去の中間的時代の意で、「近比」に比してある程度過去の時代をやや広範に指示する語。使用する時代によって指示する時代も異なるが、本集成立時を基点とすれば、大体平安時代中期をさすとみて大過なからう。

四身分卑しからぬ人。類「階シナ」。

五「おふし」は「おし(啞)」の古語。和「瘡瘡於布之」、類「瘡オフシ コト、モリ」。「瘡」の字については所見がなく、「瘡」の誤写とみる。

六生霊・死霊・獣霊など、人間に乗り移って多く祟りをする霊魂。怨霊、悪霊の類。

七大きくなるまで。成長するまで。

女ハ此ノ家ノ子ト永ク夫妻トシテ、京ニ上テ住ケリ。「此レ偏ニ観音ノ御助也」ト信ジテ、弥ヨ懃ニ観音ニ仕ケリ。

実ノ心有ル者ハ、此ゾ仏ノ利益ヲモ蒙ケル。女ノ語ケル也、トナム語り伝ヘタルトヤ。

瘡女依石山観音助得言語第一一十一

本話の典拠は未詳。同話は『三國伝記』五の二にも所見。啞の孤女が石山観音に参籠して高名な験者に出会い、その加持を受けて啞がなおった上、験者に与えた水晶の数珠の縁で別れた夫とも再び結ばれた話。石山観音の霊験譚として構成されているが、本質的には、中古人氣絶大だった品高き不遇の美女をめぐる説話的类型に属するものである。前話とは、特に旧夫との奇遇というモチーフを介してつながっている。

捕え、その国の者をつけて護送してきたので、男を糾問した。しばらくは白状しなかったが、拷問の結果ついにあるのままに白状した。元の妻は御簾の中でこれを見てまことに哀れに思った。この盗人の男を野に連れて行き首を切ってしまった。

女はこの国司の息子と末長く夫婦となり、京に上って住むようになった。これはひとえに観音のお助けであると信じて、いっそう心をこめて観音にお仕えたのであった。信心のあつい者はこのように仏のご利益をこうむるものである。この話は女が語ったものだ、とこう語り伝えていこうとだ。



ハ見捨てて世話しなかつたの意。  
ハ父母の打ち続く死をしるすのは、  
不遇な美女を主人公とする説話・物  
語における常套的手法。ちなみに、  
第七・第八話・卷一九第五話など、  
いづれもそれである。

二 将来の生活のよるべ。頼りない  
姫娘の将来を憂慮し、子供の扶養を  
期待したのである。

二 この一句には、啞ではあるが、美  
人なんだから」といった気持が潜在  
している。「チ」は「形」の捨て仮名。

三 啞娘なので、末長くというわけ  
にはゆくまいが、しばしの間は夫に  
なる人もいざれ現われるだらうの意。  
「見ル」は契りを結ぶ、結婚するの意。

三 清涼殿の「殿上」の間と昇ること  
を許された人で、四位・五位、また  
六位の蔵人の称。

四 「チ」は「形」の捨て仮名。  
五 さりげない様子で。何食わぬ顔  
で。娘が啞であることなど知らぬ  
ふりて。源氏、空蟬「さりげなき姿  
にて」。

六 得心させたので。承知させたの  
で。

七 結婚した後。「合フ」は男女の契  
りを結ぶ、結婚するの意。

八 離れがたくかわいらしく思つて。  
一 二六六頁注。

九 恥ずかしがつているのか。「はぢ  
しらふ」の「しらふ」は、相関作用に  
よつて生ずる動作・状態を意味する  
語。

三〇 「ノ」は「物」の捨て仮名。  
三一 愛情。「シ」は「志」の捨て仮名。

今昔、誰トハ不知ズ、中比、京ニ階不苟ヌ人ノ娘有ケリ。

形ハ極テ美麗ニシテ、生ケルヨリ痘ニテゾ有ケレバ、父母明

暮此ヲ歎キ悲ムト云ヘドモ、甲斐無シ。暫ハ、「神ノ祟カ。

若ハ靈ノ為ルカ」ナド疑テ、仏神ニ祈請シ、貴キ僧ヲ呼

祈ラセケレドモ、長大スルマデ遂ニ物云フ事無ケレバ、後ニ

ハ、父母棄テ不知ザリケリ。然レバ、乳母ノミ此ノ人ヲ哀レ

ムデ過ル程ニ、父母打次キ失ニケリ。

弥ヨ、乳母此ノ人ヲ悲ムデ、歎キ思ケル様、「此ノ人ニ男

ヲ合セテ、子ヲ令生テ、末ノ便トモ為バヤ。形チ美麗ナレバ、

暫ハ見ル人モ自然ラ有ナム」ト思得テ、或ル殿上人ノ形チ吉

ク、心ニ情有ケルヲ、然氣無クテ合セテケリ。女ニモ乳母

泣々ク此ノ由ヲ云聞セテ、心ヲ得サセタレバ、合テ後日來通

フニ、男女ノ美麗ナルヲ見テ、難去ク労タク思テ万ヲ語フニ、

女惣テ物ヲ不云ネバ、暫ハ、「恥シラヒタルカ」ト思フニ、

物ノ云ハムト思タル気色乍ラ、目ニ涙ヲ浮ヲ見テ、男、

「此レハ痴也ケリ」ト心得ツ。其ノ後、志シハ愚ニ非ズト

今は昔、だれとはわからぬが、かなり以  
前のこと、京に家柄の卑しくない人の娘が  
おつた。容姿はたいへん美しいが、生まれ  
た時から啞であつたので、父母は明けくれ  
これを嘆き悲しんでいたがなんのいかいもな  
い。しばらくの間は、「これは神の祟りか  
あるいは何かの靈の仕業か」と疑つて、神  
仏に祈請したり、尊い僧を呼んで祈らせた  
りしたが、成人してもやはりものを言うこ  
とがなかつたので、後には父母もかまわな  
くなつてしまつた。そこで、乳母だけがこ  
の女に哀れみをかけながら過ごしているう  
ちに、父母は相次いで死んでしまつた。  
乳母は前にもましてこの女のことを哀れ  
み、嘆きながらも、「なんとかこの人に夫  
を持たせ子供を生ませて行く先安穩に生き  
られるようにしてあげたいものだ。容姿も  
美しいからしばらくは妻にする人もきつと  
いるだらう」と考えついで、美しく情けの  
ある一人の殿上人にそ知らぬ顔をして取り  
持つた。乳母は女に対しても泣く泣く事の  
訳をよく言い聞かせ納得させたので、二人  
は結ばれたが、その後男は毎日のように女  
のもとに通つてきた。男は女の美しいの  
を見て離れがたくいとおしく思い、なにかと  
女に語りかけるのだが、女はまったくもの  
を言わないので、男はしばらくは「恥ずか  
しがっているのか」と思つていたが、女が

一 歴史的仮名づかいは「かたはもの」であるが、当時「かたわもの」と発音していたので、かく当てたもの。普通「片端者」を当てる。不具者。  
 二 男の来訪が途絶えがちになるさま。男性の愛情の減退を意味する常套的表現。  
 三 ↓一九三六「注四」。「うシ」のよみについては、卷三二第七話に「心疎ウキ事」とある全訓捨て仮名による。  
 ↓四六六「注三」。  
 四 行く方をくらまして。

五 諸所方々。

六 ↓六六六「注二七」 七 親類。親族。

八 観音像を安置してある仏堂。

九 「難有キ」は「衆生ノ願」にかかり、かなえがたい衆生の願いの意。

一〇 「ケ」は「仏」の捨て仮名。

二 罪業。現世の悪報のもととなる罪過。

三 来世の救済、つまり、極楽往生を願ったもの。

云へドモ、「片輪者也」

ケリ」ト思フニ、少シ

枯々ニ成ヲ、女、「心

疎シ」ト思テ、跡ヲ暗

クシテ失ニケリ。

男女ノ許ニ行タル

ニ、無ケレバ、「失ニ

ケリ」ト思フニ、形有様ヲ思ヒ出サレテ、心ニ係リテ、此ヲ

恋ヒ悲ムデ、諸ノ所々ヲ尋求レドモ、尋得ル事無ケレバ、

歎キ乍ラ過グルニ、女ハ、石山ト云フ所ニ此ノ乳母ノ類也ケ

ル僧ノ有ケルヲ尋テ、親キ女房一人女ノ童許ヲ具シテ行ニ

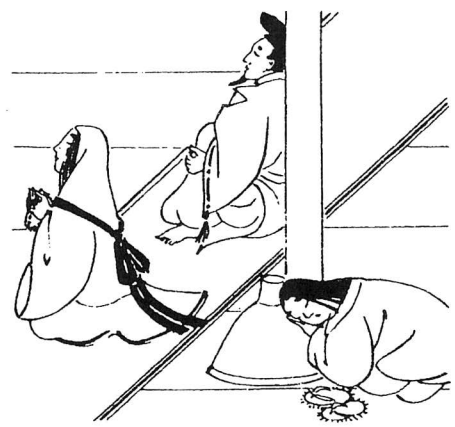
ケリ。其ニシテ「尼ニ成ナム」ト思ケルニ、此ノ石山ノ御堂

ニ籠テ、心ヲ至シテ念ケル様、「観音ハ難有キ衆生ノ願ヲ満

テ給フ事、他ノ仏ケニハ勝レ給ヘリ」ト聞ク。然レバ、我が

此ノ病ヲ救ヒ給ヘ。若シ、前世ノ悪業重クテ、救ヒ給ハムニ

不能ズハ、我レ速ニ死ナム。必ズ後世ヲ助ケ給ヘ」ト。



参籠(石山寺縁起)

何か言いたそうな様子を見せながら目に涙を浮かべているのを見て、「この女は啞だつたのだ」と気がついた。それからは、深い愛情は抱きながらも片輪者なのだと思つたと、いくぶん足が遠くなつてきたのを、女はつらいことだと思つようになつて、どことも知れず跡をくらましてしまった。

男は女の家に行つてみると女がいなくて、さては身を隠してしまつたのだなと思つと、女の顔や姿が思い出されて心に掛かり、恋い悲しんでこそぞと思つ所を八方手を尽くして捜したが見つからないので、嘆きながら日を過ごしていた。女は石山という所にいた自分の乳母の親類に当たる僧を尋ねようと、親しい侍女一人と小間使の童女だけを連れて出かけた。そこで尼になろうと心に決めたものだから、石山の御堂に籠つて心をこめ、「観音様はかなえがたい人々の願いをおこなえてくださること、ほかの仏様にまさつておいでだ」と聞いております。それゆゑ、どうぞこの病をお救いくださいまし。もしもわたくしの前世の悪業が重くてお救いくださるうにおおできにならないなら、すぐ死のうと思つます。その時はなにとぞ後の世をお助けくださいまし」と言つて祈念した。

このように祈念して数日参籠していたが、当時、比叡山の東塔に「阿闍梨」という阿闍梨が

三 一五二頁注一。  
 四 僧名の明記を期した意識の欠字。  
 三 国伝記に「比叡山ノ行者無動寺ノ円満房ノ阿闍梨」とする。  
 五 加持祈禱の験力を積んだ僧。修験者。  
 六 首をたれて。うなだれて。帰依隨順するさまの形容。  
 七 これまでのいきさつ。事の次第。  
 八 「利益衆生」の音読。  
 九 祈禱。呪文を唱え、印を結びなどして、神仏に祈念すること。↓①五九一頁注六。  
 一〇 「シ」は「験」の捨て仮名。  
 一一 発憤して。加持の成果が上がないことを怒り、一段と心を奮い立たせての意。  
 一二 三 国伝記「愛ニ度女口ヨリ淡々(ハ)泡」ヲ吐ク事一時計リ有テ後」  
 一三 「舌付」は物言いが明瞭を欠くこととて、俗にいう舌足らずの人。和「禪定之多都舌不正也」。  
 一四 「早ウニ也ケリ」(↓)一〇四頁注五の「ケリ」を略した形。↓①九八頁注六。なんとこれまで啞だったのは、長年にわたる悪霊の仕業だったのだなあと、初めて原因がわかったの意。  
 一五 「悪霊」は人に乗り移る靈魂(↓一二七二頁注六)の中で特に災厄をもたらすものの称で、悪霊によって起こる病氣を「靈病」と称した。  
 一六 ほんのお礼のしるしにと言つて。  
 一七 「シ」は「注」の捨て仮名。  
 一八 水晶製の数珠。  
 一九 比叡山をさす。  
 二〇 石山をさす。 二一 旧夫。

癡女依石山観音助得言語第二十二

如此ク念ジテ、日来籠タル間ニ、比叡ノ山ノ東塔ニ  
 ト云フ阿闍梨有リ。世ニ勝レタル験者也。時ノ人皆首ヲ低  
 テ帰依スル事無限シ。其ノ人石山ニ参タルニ、御堂ニシテ  
 此ノ癡女ノ籠タルヲ見テ、問テ云ク、「此レ、誰人ノ、何  
 ノ故有テ籠レルゾ」ト。女物ヲ不云ネバ、文ニ書キテ有様ヲ  
 聞カス。阿闍梨ノ云ク、「我レ君ノ病ヲ祈テ試ム。此レ偏  
 ニ、利益衆生ノ故也」ト。女喜ブ由ヲ亦書テ見スルニ、阿  
 闍梨観音ノ御前ニシテ心ヲ至シテ加持スルニ、三日三夜音ヲ  
 不断ズ。然レドモ其ノ験シ無シ。其ノ時ニ、阿闍梨嘔ヲ発シ  
 テ泣々ク加持スルニ、女ノ口ノ中ヨリ物ヲ吐出ス事、一時  
 許也。其ノ後、物ヲ云事舌付ナル人ノ如シ。然レドモ、其  
 ヨリ物ヲ云フ事例ノ人ノ如シ。早ウ年来悪霊ノ致ケル也。  
 女泣々ク阿闍梨ヲ礼拝シテ、注シ許ニトテ、年来持タリ  
 ケル水精ノ念珠ヲ、阿闍梨ニ与ヘツ。阿闍梨念珠ヲ得テ、本  
 ノ山ニ返ヌ。  
 女ハ尚山ニ有ルニ、彼ノ本ノ男ノ殿上人ノ、女ヲ不求得ズ

いた。非常にすぐれた修験者である。時の人はみな頭を傾けて帰依していたが、この人が石山に参詣した時、この啞の女のお籠りを見て、「あなたは何という方ですか。どういふ事情でお籠りしているのですか」と尋ねた。女は口がきけないので紙に書いて事情を話した。すると阿闍梨は、「わたしがあなたの病の祈禱をしてあげよう。これもひとえに観音様の利益衆生のお心によるものです」と言う。女はありがたいということをもまた書いて見せたので、阿闍梨は観音の御前で熱心に加持をはじめ、三日三晩声も休めず祈り続けたが験が現われない。そこで阿闍梨は加持の及ばぬのを怒り、声をいっそう荒げ泣く泣く加持をしたところ、女は口中から物を吐き出すこと一時(二時間)ほど。その後話せるようになったがそれは舌足らずの人のようであった。だがしだいに普通の人のように話せるようになった。なんとこれは長年悪霊がなせるわざであったのだ。  
 女は涙ながらに阿闍梨を礼拝し、ほんのお礼のしるしにと言つて、長年持っていた水晶の数珠を与えた。阿闍梨は数珠をもらい、元の比叡山に帰って行った。  
 女の方はそのまま石山にとどまっていたが、あの元の夫である殿上人はこの女をどうしても捜し出せず、にわかには道心を起

一「靈驗所」(一七九頁注三)に同じ。靈地靈場。二修行の意。

三比叡山東塔の根本中堂をさす。一〇一七頁注三。

四「彼ノ水精ノ念珠ヲ」、「物ニ係タルヲ」はいずれも「見テ」にかかる。本集に頻出する「ヲ」の語法で、まず最初に主対象である「水精ノ念珠ヲ」とし、次いでその状態を説明して「物ニ係タルヲ」とした

もの。一〇二九頁注二。

五「反射的に」とつきに。あつと驚くままに。考える暇もなく反射的に問いかけた状態で、現代語のいわゆる不意にの意ではない。

六祈禱によって病気をなおす意。七まさしくわが尋ねる女であったの意。一〇三三頁注三。

八「主格は女。女はしばしの間は身元を隠して取り合おうとしなかったけれどもその意。全書以下に、隠れて出てこなかったの意に解するは当たらない。

九「そのような訳だったのか。女が男の話を聞いて、男の深い愛情のほどを理解したのである。

一〇「単なる出会いの意ではなく、夫婦の縁を結ぶことという。ここでは夫婦のよきをもどしたの意。一〇二七三頁注二。一一二六四頁注三。

三一「卷一」第一七話・四七頁注一六「靈異記」「眼精言」。靈異記訓注に「精言安支之比」とあるによれば、和

「清盲俗云阿岐之比」。

シテ、忽ニ道心ヲ発シテ所々ノ靈驗ノ所ニ参リ行ケルニ、

比叡ノ山ニ登テ、中堂ニ参ケルニ、此ノ阿闍梨本ヨリ知タリ

ケレバ、其ノ房ニ行テ物ナド食テ打息ムニ、彼ノ水精ノ念珠

ヲ物ニ係タルヲ見テ、不意ニ阿闍梨ニ問テ云ク、「此ノ念珠

ハ何コナリツルゾ」ト。阿闍梨ノ云ク、「石山ニテ瘡ナリシ

女房ノ籠リシヲ祈止テ得タリシ也」ト。此レヲ瘡ト聞クニ、

心騒テ細ニ問フニ、有様ヲ語ル。此レヲ聞クニ、只其レニ

テ有リ。心ノ内ニ喜テ京ニ忿ギ返ヌ。

其ヨリ石山ニ行テ尋ヌルニ、暫ハ隠スト云ヘドモ、強ニ

尋テ年来ノ事ヲ云入ルニ、女、「然也ケリ」ト聞テ、遂ニ合

ヌ。互ニ泣々ク年来ノ事共ヲ語テ、忽ニ相具シテ京ニ返テ、

深キ契ヲ成シテ夫妻トシテ棲ケリ。「偏ニ此レ観音ノ利益也」

ト知テ、弥ヨ共ニ心ヲ至シテ仕ケリ。

観音ノ靈驗此クゾ有ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。

こしあちらこちらの霊場を回って参詣を続けていた。やがて比叡山に登り根本中堂にお参りしたが、さきの阿闍梨は前々からの知人であったのでその僧房に行き食事などして休息していると、例の水晶の数珠がそばに掛けてある。それを見つけるやとつきに阿闍梨に向かい、「この数珠はどこにあったものです」とときく。阿闍梨が、「石山に啞の女性がお籠りしていましたが、その人を祈禱でなおしてやってもらったものです」と答えたが、それが啞だと聞くや胸騒ぎがして、さらに細かに様子を尋ねると、阿闍梨は一部始終を語って聞かせた。聞いてみればまちがひもなくあの女である。喜びに胸をおどらせて急いで京に帰ってきた。それからすぐ石山に行って尋ねると、女はしばらくの間は身元を隠して取り合おうとしなかったが、無理に面会を求め、今までのことを女に訴えたと、女も、そのようなことであつたのかと思ひ、ついに会つて夫婦のよきをもどした。そして互いに今までのことを涙ながらに語り合ひ、すぐに連れ立って京に帰り、深い契りを結び夫婦として生活するようになった。これもひとえに観音のご利益であると思つて二人ともにいっそう心をこめて観音にお仕えた。観音の靈驗はこのようなものなのだ、とこう語り伝えていふことだ。

四 これ以下、段末まで、靈異記にみえず。

五 変わりなかつたの意。嘆き悲しんだけれども、そのかいがなかつたことをいう。

六 これ以下、「此ヲ深ク信ジテ」まで、靈異記の「帰敬観音」を敷衍。

七 一〇二二頁注。

八 目の見えない人。

九 「日」は太陽、「摩尼」は梵語日月の音写で、珠の意。日の珠、つまり日輪・太陽と同意で、「日精摩尼」ともいう。千手観音は左の上方第一手にこの宝珠を持ち、その手を「日摩尼手(日摩尼ノ御手)」という。観音の法力の一で、盲人がこの珠に触れば開眼して明を得るとされる。なお、日天子は観音の变化身の一で、太陽を住殿とする。

一〇 和「手巾和名太乃古比」。靈異記訓注「巾太力(乃)己比。類「巾箱タノコヒノハコ」。手ぬぐい。上の「布」は麻布などであらう。

一一 靈異記、この句に続けて、「或坐三巷陌、称礼如上」とする。

一二 三六時の一。正午。僧の勤行の時でもある。寺家では斎食または斎とって午前前に食事をするのが決まりなので、盲人は時報の鐘によって正午と知り、寺中にはいつて僧の残飯の施しを受けたのである。色「日中ニチウ」。

一三 元明・孝謙(重祚して称徳)兩天皇の称とするが、靈異記では孝謙(称徳)天皇をさす。靈異記「帝姬阿倍天皇之代」。↓一〇二五六頁注。

盲人依観音助開眼語第二十二

### 盲人依観音助開眼語第二十三

出典は『日本靈異記』下の二二。薬師寺の近くに住む盲人が千手観音の日摩尼手を祈念し、化人の治療を受けて両眼が見えるようになった話。前話に引き続き、身障者を治癒した観音の靈驗譚である。

今昔、奈良ノ京ノ薬師寺ノ東ノ辺ノ里ニ一人ノ人有ケリ。

眼盲タリ。年来此レヲ歎キ悲ムト云ヘドモ、事無カリ

ケリ。

而ルニ、此ノ盲人千手観音ノ誓ヲ聞クニ、「眼暗カラム人

ノ為ニハ、日摩尼ノ御手ヲ可宛シ」ト。此ヲ深ク信ジテ、日

摩尼ノ御手ヲ念ジテ、薬師寺ノ東門ニ居テ、布ノ巾ヲ前

ニ敷タリ。心ヲ至シテ日摩尼ノ御名ヲ呼ブ。行来ノ人此レヲ

見テ、哀ムデ錢米ナドヲ巾ノ上ニ置ク。亦、日中ノ時ニ、

鐘ヲ撞ク音ヲ聞テ、寺ニ入テ、諸ノ僧ニ食ヲ乞テ命ヲ繼テ、

年来ヲ経ル間、阿倍ノ天皇ノ御代ニ、此ノ盲人ノ所ニ二人ノ人

今は昔、奈良の京の薬師寺の東のあたりの里に一人の人がおった。両眼がつぶれており、長年これを嘆き悲しんでいたがなおりそうにもなかつた。

ところが、この盲人が千手観音の誓願に、「目の見えない人のためには日摩尼の御手を当てる(開眼させて)やろう」とあるのを聞き知ってこれを深く信じ、日摩尼の御手に祈念をこめ、薬師寺の東門の所にすわり、布の手ぬぐいを前に敷き、心をこめて日摩尼の御名を声高に唱えていた。行き来の人がこれを見て哀れに思い、錢や米などを手ぬぐいの上に置いてやった。また正午のお勤めの時刻に撞く鐘の音を聞いて寺にはいり、僧たちに食物を乞うて命をつなぎながら長年過ごしていた。そのうち、阿倍天皇(孝謙天皇)の御代のころ、この盲人